

「耕文小校の興りと変遷」

平成26年7月5日

於 高森町歴史民俗資料館時の駅

講師 光専寺住職 宮原祐敬

改めましてこんにちは。まずは時の駅講座の開講、誠におめでとうございます。15年ということで長き年月を皆様方が進めてこられて、昔のこと、あるいは今につながることを探求してこられた、その貴重な一時を今回いただきまして、時の駅講座「耕文小校の興りと変遷」ということでお話しをさせていただきます。どうぞよろしくをお願いします。

早速何をしゃべろうかと思ってまいりましたけれども、お足元のお悪い中、多くの皆様が関心を持っていただいております。松上館長さんからは「何を喋っても良い」と言われましたので、タイトルは「耕文小校の興りと変遷」と一応致しましたけれども、そうではないことの方がきっと多いと思います。ふんふんと聞いていただければと思います。それで絵が出てまいりますし私もレジュメに沿ってお話しをいたします。速かったら「速い」と、遅かったら「遅い」とつまらなかったら「つまらん」と言っていただいで、何か反応していただければうれしいかと存じます。

私はこうやって人の前で話すというのは非常に苦手です。ご紹介いただいたように吉田の光専寺の住職を務めさせていただいておりますし、吉田河原保育園の園長として、日々子どもたちと過ごさせていただいております。お寺の方は代々伝えられていることを出来る限り忠実にそして分かり易くしようかなと思っております。子どもたちに保育園で接する時には、分かり易く簡単なことを、しかも当たり前のことをきちんと伝えるようにそんな思いで接しております。ですので、実はこういう公の場でこうしてお話をする機会は滅多にございません。お聞き苦しい点が多々あるかと思っておりますのでお許しいただきたいと思っております。

平成22年の第二回時の駅講座で、一度お時間をいただきまして、それは光専寺の方でお話しを致しました。絵画ですとか書、それからその当時からある建物等を皆様とご一緒に散策をしながら見て回ったことを思い出しながら本日を迎えました。今日はこの場で喋ると言うことで、特に手持ちぶさたになりそうですけれどもひとつよろしくお話しをいたします。

1、光専寺の沿革

①沿革

耕文小校といっても、それ以前の話もありますので光専寺の沿革から話をさせていただくのが良いかと思っております。正面には当時の本堂というものが書いてあります。これは大正10年の本堂です。沿革と致しましては浄土宗ということでございます。鎮西派という一番大きな派に属しております、総本山は京都の知恩院でございます。東山の八坂神社の近くです。八坂神社は皆様お参りしたことがあるかと存じます。京都に赴かれることがございましたら、特に11月はモミジの紅葉が良い季節かもしれませんが、奥まったところに宗祖法然上人のお亡くなりになった地もございます。知恩院でございます。その他にも七つほど本山がございます、東京タワーの麓に増上寺という大きなお寺がございます。徳川家康公が菩提寺として深く帰依し、寺所を寄進したり学問所を整備したりと浄土宗の興隆に大きな影響を及ぼしたお寺でございます。それから長野の方にご開帳で有名な善光寺さんがあります。善光寺さんの本坊と申しまして、少し下った所に大本願というお寺がございます。こちらの住職は現在は誓玉上人と申しまして、代々皇族に縁のある方がお上人として入られております。この地元には元善光寺さんがありますが、浄土宗では善光寺大本願を本山の一つに数えてあります。

②開創

光専寺の開創は、永禄年間だそうです。この頃の資料がお寺にはほぼありませんで、分かることは多くないんですが。1558年から1569年の永禄年間で、ちょうど450年ほど前に開かれたということで、正親町天皇の時だったという記録がございます。その当時は今の場所ではなくて、吉田神社の境内地の西側だったと言われております。その場所を宮之原と言いまして、私は宮原と申しますので、こういう所に縁があるかと感じますし、それも一つの歴史のロマンかなと感じながらおります。しかしながら戦国時代に焼けたり、また創建したり致しました。

③消失と中興

天正10年、織田氏勢の進撃と兵火によりお寺が焼失いたします。

吉村本亭氏という当時の城山城主の方が、寺の領地を寄進して下さり今の地に移りました。開基は吉田神社の

境内の西側です。これは本島氏、今の本島恭則先生の御一統ですね、の先祖の方だと言われております。そのご縁もありまして、皆様氏神様がおありかと思っておりますが、本島氏の氏神をめずらしくお寺で務めさせていただいております。毎年、12月になりますと御一統の皆様がお寺にお集まりになり、お寺の麓に一つの庵がございますが、そこで一年のお勤めを致しまして氏子祀りを致しております。吉城窟北側に吉村本亭氏ご夫妻の墓所がございます。

④移転

延宝7年(1679年)に城山の地に移転いたしまして現在に至っております。年号は諸説あるので特定は致しかねますが、こうして何代か経た中で今の地に位置付いてきた、そのような興りでございます。

歴史ものになりますと、どうしてもその当時の権力者の良いように諸説が書かれていたりもう残っていなかったり、様々な災害等がある中で栄枯盛衰があったということを感じるより他ないかなあと思うわけですが、しかしながら代を重ねていって住職やその先人の思いを受け継いでいくという思いを新たにしているところでございます。

2、耕文小校の興りと変遷

①寺子屋時代

いよいよ2番の耕文小校の興りと変遷ということに入ります。

まずお寺は、いつでもどこでもと言ったら語弊がありますが、寺子屋を大体しておりました。お寺でなくても庄屋ですとか名士の方が寺子屋を開いて子弟の育成をしたと思います。光専寺は安永9年(1780年)に寺子屋を設立したと言われております。それは学問の象徴としての天満宮、いわゆる天神様を建立したのが安永9年と言われております。

次の絵を出しましたが、3つの祠がございます。このうち左上の写真、これが天満宮と書いてあります。右上は何かという稲荷神社でございます。下は、一つは蚕様の神様蚕玉宮です。それから妙見大菩薩と書いてありますが、何でもしっかりと見て衆生を救う菩薩さんの祠が祀っております。これは光専寺の境内地ですけれども、今の城山公園の東側に当たります。これが建立されたのが安永9年です。住職はだいが代を下りまして16世の玄蓮社釣譽天遊上人という方でございます。この天遊さんという方は高森町史にも良く出てくるお一人で、文化人としてはこの辺りでも有名だったのかなあと推測致します。お寺のことで言いますと本堂をお建てになったり、後は他の祠堂を整えたと言われております。お寺のもう少し北側、吉田保育園のもう少し北側にお檀家さんのお宅があるんですが、そこにご隠居の家があったのではないかと、その家の方が代々伝えられているということでございます。周りの方々にとっても寺子屋を始めて影響が深かった方ではないかと推察されます。寺子屋を設立した5年後天永5年10月15日、74歳で亡くなられたというそんな記録もございます。漢詩やあるいは書、等々町史に載っているものもございますので、機会がございましたらご覧いただければと思っております。お寺の正面玄関の所に建つ石碑がございますが、向かって右側はその天遊上人のものであろうと言われております。そしてその寺子屋ですが、菅原道真公のご神像を飯田出身の方が作られております。井出右兵衛祐正です。現存するのは明治2年作のものです。これを頼りに勉学に励んだ経緯があるそうです。3枚のうち下の写真を見ていただくと、中に天神祭の時に使う御神輿があります。春、あるいは秋に、吉田神社の例祭が行われますが、その時に子どもたちが御神輿を作ったり、その御神輿を気負って境内を3回回ってからお宮に行く。天神様にお参りをしながら行くと、そんなことを伝承として伝えられておりますし、昔はそうだったんだと教えてくれる方もまだまだお元気でございます。その名残があるということです。

寺子屋時代は、まだその後も明治の初期に耕文小校ができるまで続いていくというわけです。特に18世の勇譽順教上人と22世の福譽祐善上人という方が取り上げられております。高森町史にもお二人の名前がありまして、いつの時代の方だったかと申しますと、この勇ましい名前だと思いますが、猛蓮社勇譽順教上人という第18世の方は、文化10年(1813年)8月14日に64歳で亡くなっておりますが、祠堂を作った方だと言われております。今からちょうど200年前ですね。それから22世の方、三蓮社福譽祐善上人は明治28年9月21日(1895年)に、だいが最近かなあという思いが致しますが、55歳で亡くなっております。この祐善和尚様というのが耕文小校の興りに深く関わり、また寄与していたと伝えられています。

②耕文小校の開校

いよいよ耕文小校が開校致します。明治6年という記録がございます。高森南小学校の要覧を拝見しておりますとこの年が載っております。今ここにお出しした写真は第19番中学区伊那郡吉田村。これは館長さんが吉田区からお借りしてきて下さったものです。古文書が一つございます。耕文小校の教員として館野先生、そして授業生という、これはおそらく授業をした人ということではなかろうかというお話しですが、宮原祐善と書いてあ

ります。そしてその左側に、同宮原教順というお名前も見受けられます。これは飯田の伝馬町にございます来迎寺さんという浄土宗のお寺の、当時ご住職だった方です。明治初期まで幕府と田舎のお寺のやり取りを仲介するお寺が飯田に4軒ありまして、そのうちの一つ来迎寺さんの末寺として光専寺があったという記録もあります。明治の初期には光専寺はその来迎寺さんの門末から知恩院の門末へと編入したという記録もございます。そんなことで、当時お世話になっていたお寺の方に先生として入っていただいていたのではないかとということが古文書から分かるのではないかと思います。それから就学の生徒の男女の数は59人です。多いなあと思います。それから実際にいくらかかったかといいますと、教員の給料が一月に当時7円です。そういうことも書いてございますし、墨や筆、紙の価格も書いてございます。チョークがあったかどうかは分かりませんが、いろいろなものを使いながら、地球儀という記録もこの辺りにございます。合計が68円85銭ということが書いてございます。明治7年の9月です。中塚半三郎氏、馬の世話方も木下氏という記録がございました。

明治6年にこうして開校と相成りましたが、明治維新あるいは文明開化等々の流れの中で、早急に学制を整えて行く必要があったのかどうかということだと思います。ただ、実際なかなか学校を別に建てて先生を雇うということはなかなか行きにくかったようで、町史のほうにも「学校の必要性は感じていたのだが学制頒布を受けてみると校舎や教員を考えて見て早速というわけにはいかない。そこでとりあえず寺子屋風の学校を考えて、どこでも遠慮がちに伺書を出したものと見える」そういうことございます。それまで寺子屋として多くの支持がありそこで過ごしてきた、少なからず座学を学んできた所で、それを延長しながら子女を教育していこう、学校教育制度へと移り変わっていこうという所の過渡期であったろうと伺います。その時の、これは高森町史からの抜粋ですが、耕文小校として、「当時変則小学、おって正則に至らしめんと期す」と。まあだんだんと学制に定められた時間割ですとかあるいは学校としての有り様にしていきましょうということございます。

はっきり見えますでしょうか？大丈夫ですか？読みますので。続いて教則、これは教える側のことだと思いますが、小学校教則に照準し領下し易き書を取り、各々才識の赴く所を以て授く等差あり」と書いてあります。小学校の教則というのが出たんでしょうね。それに照らし合わせながら子どもたちに分かりやすいような書物、あるいは教科書を選んで使うということでしょうか。なおそれぞれが才識の赴く所を以て、これは先生の力量、私もここに立ちながらどきどきして話しておりますが、だいたい当時の先生の力量に委ねていたところが大きいんじゃないかと思います。

でもそれも、人が人を育てるということだと思いますと、名文句かなあということも感じております。そして校則がございまして、「父兄生徒の就学を達し、入校金を納め、名刺を投簿に上せ子弟の契約を取る。退校を乞う者、事故糾察をして止退を決す。生徒、学の成否を以て等級を分かち。小学則の如し。公事を私議し事、雌黄するなかれ」

ちょっと調べてみたんですが、私よりもお歴々の皆様ですので、「雌黄するなかれ」という文がございますが、これは雌黄というのは中国で文字の抹消に用いた黄色の樹脂が、転じて改ざんとか訂正という意味があるそうございます。なので「公事を私議し事を雌黄するなかれ」とは公の行事を私事でいろいろ変えることをしてはいけませんよ、という意味かと思ひます。

そして「坐作進退厳肅、整頓を要す」

まさにその当時の気風ですね。厳しいようにも見えますけれども、しかし所作身体全て法にかないということをお坊さんたちも事あるごとに気にかけております。座るあるいは作業をする、進む退く、行住坐臥、起きている時も寝ている時も、自分の身の回りをきちんとしておかないといけませんよという意味だと思います。

次に「師命を違背し長者を凌ぐなかれ」

これはもう読んで字の如くだと思います、「敬上慈下」という言葉がございますが、目上の方を敬って下の者を慈むというのが「敬上慈下」と教えられておりますが、こうして学校教育の中にも浸透しているのであろうと思ひます。

次は「訛語を主張し亡言を伝え、戯謔大笑するなかれ」

なかなかこれはおもしろい校則だと思うんですが、過語というのはなまめた言葉だと書いてあります。だからこれは正しい言葉ではない言葉ということですかね。今はだいたいこういう言葉にもだいたい寛容になってきた社会ですので、どれが過語でどれが正しい言葉か、一度聞いてもわからない、そんな感覚になってきています。なまめた言葉、正しい言葉ではない言葉を主張したり、暴言を吐く、「戯謔」というのはおどけたり戯れたりすることだそうです。で、大笑は呵々大笑の大笑ですかね。恥ずかしげもなく大きな声で笑ってはいけないということであろうと思ひます。

次は履き物ですね。「履を乱着し器械を抛却すべからく。私宅その他へ出る、是を教員に訴え許可を得るべし」

履き物もきちんとそろえましょう。器械を打ち据えることはしてはいけません。私宅その他へ出る時は必ず教

員に許可を得てから出ましようということですね。最後に「校中飲酒を禁ず。遊器を弄ずるなかれ」これを校則に入れるほど血気盛んだったということでしょうかね。校内で飲酒をしてはいけませんということが書いてあるのと、いろいろな物を大事に使いましようということだと思えます。遊器というのはひょっとしたら人の器のことかもしれませんが。厳にしっかりと厳かに丙丁を言いましようとありますので、やはり自分の身を正しゅうしながら勉学に励んでいくのが自分のためであり、またお国のためでもあったんではないかと思うところがございます。

これも町史からの抜粋ですが、当時の耕文小校の絵図でございます。「ただし光専寺庫裡のうち借り受け候なり」と書いてございます。お見えいただいた方はご存じかもしれませんが、この辺りが今の玄関口です。で、ここに階段があります。この南と書いてあるところが本堂なんです。こんな図が書いてあります。今の庫裡と比べてみますと、この廊下なんかは似ているのかなあと思えますし、ここに床の間と書いてありますがこれも今もあります。8畳と6畳の講堂もあります。習字場20畳とありますがこれはちょっと今と違って広いかなあと感じます。そんなことで今の庫裡をちょっと写真に撮ってまいりました。床の間です。ここが廊下です。今は10畳が二間です。こっちの下の方が玄関です。館長さんがちょうど1週間前に打ち合わせにお見え下さった時に、縷々お話ししながらアルバムを紐解いたりどんな風にお話ししたらよいかと思いの丈をぶつけながらご不安申し上げた余韻が、多少この机の上に漂っております。そんなことでございます。

これがずっと建て直されることなく今まで残っているという風に私は聞いています。ただこういう建物も、他の大きな建物を解体する時の材を拝借して持ってきて造られたということを聞いたことがありますので、その辺をどなたかご存じの方が居られましたら教えていただきたいと思えます。

耕文小校の時代を経まして、明治8年には法令が出まして学校名を校地名とか町村名に変更しなさいよというのがあったそうでございます。それ以前には耕文小校以外にも、市田地区には他に5つ学校がありました。申し上げると下市田安養寺さんの所訓蒙小校がございましたし、牛牧の明永寺さん（今はございませんけれども）には広胖小校という学校がございました。大島山の全性院、これは瑠璃寺さんの塔頭寺院だったと思えます、明性小校、そして出原の宝泉寺さんには精勤小校、そして上市田だけは観音堂でしたが（ちょっと私は由来は存じ上げませんけれども）維精小校という学校が6つありました。それぞれ時代が下っていくにつれて分かれたり統合したりということがございます。今回私もお話しをさせていただく中で、「高森の学校教育」という特別展が展示をされたということで、私も何日か前に行き行って参りました。私の話を聞くよりもそこでじっくり過ごされた方がよっぽど良いんじゃないかと思うぐらいでありました。ちなみにこの牛牧の明永寺さんにあった広胖小校の胖という字は月（にくづき）を書いて半と書きます。なかなか普段は使わない字です。それなのでちょっと調べてみましたら、一番の意味としては、神様仏様への生け贄にするための半身の肉を指すんだそうです。なので月（にくづき）に半分の半を書くんです。それともう一つ肥えているという意味があるんだそうです。そして更に転じて、豊かなとかおおらかなという意味合いがあるんだそうです。なので広胖小校という名を望まれた、思いを寄せたのは豊かにおおらかに子どもたちが育って欲しいという思いではなかったかと思えます。

そして、他も気になって調べてみましたら、上市田にありました維精小校ですが、この維新の維は縦糸を表す字で、綱ですとか糸筋そういう物を意味する字ですが、そこから繋ぐという意味が出てきて、しっかりと精進をして勉学を繋げていって立派な大人になるようにという思いもあったではなかろうかと思えます。安養寺さんの訓蒙小校は、これはキンモウとも読むんだそうですが、これは、子ども・初心者に教え諭すこと、あるいはまたその書物をクンモウあるいはキンモウと言っていたということがございます。耕文小校の耕文はどこの辞書を探してもなかなか出てこなかったものですから、きっと文を耕す、文学、あるいは心を耕す、こうした思いではなかったかとそんな風を感じました。

③吉田学校 ～ 市田尋常小学校 ～ 吉田尋常高等小学校

そしていよいよ吉田学校、市田尋常小学校の時代へと下って参りますが、この写真は吉田学校の開校式の祝辞です。明治20年（1887年）正月の11日です。光専寺本堂に於いて、祐善和尚の原稿です。袖書は私の祖父の字ですが、後ろにも現物を展示してあります。これを開いた時に、この外側に訓蒙小校が、当時下市田学校が明治19年に焼けるんですね。明治20年にはすぐ建て直されます。その時の祝辞と書いている書物もあります。どちらがどちらかわかりませんので、また後で皆さんでご覧いただいて教えていただきたいと思えます。ちょっと読みます。

「北帝去りて東帝来たる」

これは冬が去って春が来る頃、「歳開きて既に11日」ということで、正月の装いを縷々書いてございまして「此処に万象應羅、佳嬉馳せ集まる。時に紀元二千五百四十七年丁亥 明治20年ですね。「本日恒例により開校の典を執行せられ、生徒各々書籍を提げ絡繹躍然として校門下填充し雑踏いわんかたなし」非常に賑々しく祝典、あ

るいは学校が始まる。子どもたちも教科書を持ち続々と集まってきた。そんな事ではなかろうかと思ひます。竹内先生にもちょっと見ていただいと添えていただいとございますので、それも見たいと思ひます。「然れども」すなわち「雑踏いわんかたなし」ではあるけれども、礼節を失せず威儀敢然として昇堂す」全員がしっかりと佇まいを正して本堂に上がってきたということです。「大机の前に整列す。之に於いて」人の名前が書いてございます。「橋都戸長」これは区長のことですかね。「或いは本島館林両訓導」本島先生館林先生がいらっしやったようですね。「及び職員、教場に向かつて靄然開校の式を行う」「盛意祝辞を朗読せらる。次いで客年末に於いて内規により各生の勤惰、品行學術優等習跡拔群の成績に鑑み、物品褒賞を与え典を挙げらる」

今でも小学校では精勤皆勤というのをしていると思ひますけれども、そんな流れがこの頃からあったのではなかろうかと思ひます。「汝等拵舞に堪えず」喜びに堪えずたまたま感ずる所なり。「且つ風俗の良し悪し淑徳は教育にこれ懸かると観よ」風俗の善し悪しはまさに教育にかかっているんだと。「登校の生徒倫序あり、礼節あり、威儀有りて、雑踏中も紊さざる」まったく以て、登校してきた生徒が秩序正しくそして礼節を持って、立ち居振る舞いも正しく、賑やかな中にあつてもこうした様子を乱すことなくいる。ということは「今日教育訓導の然らしむる所也」まさに教育の賜物と言うことですね。そして最後には「一日もそれを忘れることなく之を期して謹んで以て奨励の一端に置かん」と。縷々こうしたことを述べて、まさに教育は大事なんだということ、そして一生懸命に学びましょうということを書いて、そして励ました、そんな祝辞でございませう。

後ろにございませうので、ご覧いただいとと思ひます。

学校は城山城の跡に建設致しました。それまでお寺の庫裏を使つていたのをいよいよお寺の西側の、城山城の跡、一段上がつて大きな学校を造りました。これは「吉田尋常高等小学校跡」という石碑でございませうが、この後ろに写つている祠が先ほどお話しした天満宮です。これから、この石碑の所からの現在の風景です。これを見ますとこんな感じですね。吉田の里です。ここには宮島酒屋があり、この赤い屋根は吉田保育園、こちらに行くと吉田神社がある。こんな高台に建つていたんだらうと思ひを馳せるわけですね。

村内に6小校があつたにも関わらず、1村1校制の中で統合するんですね。本校がこの吉田。支校が下市田というのはよく言われます。ここは昔ですけども本校だったんだよということを、当時ここで過した方からも伺つたことがございませう。

これは昭和初期の本堂です。さきほどの写真は正 10 年の本堂です。建て直したものです。この向拝の所にお一人立つていらっしやるのはその当時のご住職です。私の曾祖父に当たる方です。まだ松が 2 本ございませう。これは今もある枝垂れ桜です。そして左に移りますとこれが 1700 年代に造られました古い観音堂です。今は新しくして観音様もお祀りしてございませう。写真の、昔のこの観音堂を見るのはこういう機会がないとなかなかないので、私もありがたかつたです。松がまだ 2 本あつたんだよと教えてくれた方もいらっしやいました。

そして昭和の初期。まだ松が 2 本あります。これが今の本堂と全く同じ造りです。屋根の葺き替えは行つておりますが、この柱ですとか襖、障子や階段、そしてこの参道も変わりありません。これが当時耕文小校から吉田学校、市田尋常小学校の時分のお寺の様子です。少しおもしろい写真がありましたので。これは吉田部校時代の同級生の写真がございませう。今回資料館の方へアルバムと写真を何点もお持ちしたんですけども、ご担当の芦部さんが丁寧に作つていただいと、タイトルも入れていただいと皆様に分かり易くなつております。写真は残つている物もあるんですけども、画像・絵面がきれいに残つている物は少ないのかなあということをおもひながら貴重な一枚でございませう。これは何かといひますと、同級会の写真の中に入つておりました。これは正 9 年に吉田の部校を卒業された方達が、昭和 42 年におそらく還暦のお祝いと申しますか集いに集まつた時の写真でございませう。この方達の中にはもう既に亡くなつた方達もいらっしやるということで、その追悼の法要もお寺の中で致して、そして皆さんと一緒に宴席を設けた、そんな記録の写真も残つておりました。ご存じの方がいらつしやいましたらと思ひますが、これが私の祖父です。皆さん明治 40 年生まれの方ですね。

④市田尋常高等小学校 ～ 市田国民学校 ～ 市田小学校 ～ 高森南小学校

いよいよ市田尋常高等小学校となります。名前を聞いたこともあろうかと思ひます。今の高森南小学校の所、唐沢に移ります。これが家にありました完成記念写真帳ですね。昭和 8 年 10 月 8 日 市田尋常高等小学校ということで。昭和 6 年から建設が始まつたという記録がございませう。いよいよ市田村で一つ大きな小学校を建てましようということに相成りまして、市田国民学校や市田小学校等の名前の変遷を経て、現在の高森南小学校になりました。じつは私も昨日は小学校の音楽会で、今日は校長先生もお見えですが、校長室に通していただきましたら、そこには時計がございまして、「大正五年度尋常高等小学校卒業生」という名の入つた大きな、「大きなのっぽの古時計」という歌がふさわしい時計がありました。伺つたら二日に一遍ねじを巻いていらつしやるということでございませう。歴史を感じながら、その先端をまさに歩んでいる小学校なのかなあということを感じました。この写真がなぜ家にあるのかなあと思ひましたら、当時の住職が村会議員をしておりまして、それでこの

建設委員か何かをしていたんですね。これは当時の配置図ですね。建物がこういう風にありまして、運動場で、門が幾つかあって、そういうことでございます。後ろに現物を置いてありますのでゆっくりご覧いただければと思います。実際に作っている様子、あるいはこれは上棟式の様子がありました。

だいぶ出来上がって参りました。この辺りは皆さんご覧になった方がいらっしゃるかもしれません。上の展示にも大きなパネルがございます。

ここに流れているのが天竜川でしょうか。

これは私の叔母の入学式です。昭和 26 年。なので建設から 20 年ほど経っていますが、同じ校舎を使っています。

そんなことで耕文小校から尋常高等小学校までざっと見て参りましたが、私がこの話を、お寺が元の小学校の発端の一つになっているんだよということを聞いた、あるいは見かけた時には「ああすごいなあ」と思いました。なかなか夢があると申しますか、歴史のロマンを感じるというか、何か特別な感情を持ったことを覚えています。もう一つ、私の記憶ですと、市田尋常高等小学校時代に山門の所で撮った写真があったんですが、ちょっとそれを探せずにおります。またどなたかそれをお持ちでしたら是非それをみせて頂けたらうれしいなと思っております。

後 20 分ほどになりました。もうしばらくご辛抱いただければと思います。私大学の時に、授業に来た先生が、その先生はドイツの哲学の先生でしたが、「ドイツの学校では 10 分遅く先生が来て 10 分早く授業が終わる」「それが一番良いんだ」ということをおっしゃっていただいたので、今日は 10 分早く終わりになれば皆様方がゆっくりと上の展示会に行かれるかなあということを思いながらざっとお話しを申し上げたいと思っております。

3、子女育成の場

これは私の曾祖父に当たりますが、光専寺 23 世祐山上人です。時代も時代ですので、きっとほとんどの方が見たことがないかと思ひまして、せつかくの機会をいただいたので大きなパネルに致しました。総本山知恩院の布教師をされておって、あまり地元に住るばかりではなかったようです。なので寺子屋みたいなことをその時にしていたかどうかは、ひょっとしたら薄かったかもしれません。しかしながらお弟子さんもいらっしゃるって、お寺のことは暇なくやっていたらっしゃったということは伺っております。しかしながら勉強ばかり教える寺子屋かと申しますとそうではなくて、やはり子女教育ということになりますと、当時は礼節ですとか身だしなみとか、女性であればお嫁に行く時に身につけておきたいことは何かというようなことがまだまだ色濃いつ時代であつたろうと思われまので、地元の方達を始めお寺に寄っていたのではないかなあと思っております。書道は勿論、華道も、関西の方には未生流という流派があるということで、その会を月に一回やっておったという風にも聞いておりますし、あとは俳句会、全国句会発祥の地ではないかということも専門の方が言って下さったということも私は聞いておりますけれども、俳句会もお寺を使って催していたそうでございます。これは今残っている俳句の額です。この祐山上人が亡くなって三回忌の時に、有志の方達でそれぞれに句を詠んで、こういう額にして下さったんだという風に聞いております。

戻りますが、「長野県保育協会研修会」ということで、昭和 15 年という日付が入っております。その頃から長野県保育協会というものがあつたことにびっくり致しました。幼児教育もずいぶん前から盛んに行われていたのかなあという気が致します。祐山上人はここに居ます。大勢の人で豆粒のようですが、おそらくこれは市田村の村議だから行つたのではないかと思います。昭和 20 年、終戦の直前の 6 月 9 日に 68 歳で亡くなっておりますので、今ご存命の方で当時の祐山上人をご存じの方はだいぶ減ってしまったのではないかなあという気が致します。この写真を見ますと、あるお檀家さんからは「よく似ているね」ということを言われます。私はどうかちょっと分かりませんが、ちょうど祐山上人が寺子屋をやつた祐善上人のお弟子さんということで、上飯田からお弟子に入られて在家からお坊さんになつた方でございます。血筋としては私や私の息子に続いているので、その当時寺自体が世襲ではありませんでしたので、誰かお弟子さんが後の住職になるのは当たり前でした。その後時代の流れもあつてこんな風になっております。

続いて、耕文小校や市田尋常高等小学校から離れたお寺ですけれども、そうはいつでもやはり地元の方達の集いの場である性格はまだありました。その中で過ごした祐山上人の長男で、私の祖父ですが、24 世の祐晃上人です。飯田高校、当時の飯田中学を出て、大正大学という浄土宗の大学へ行き、東京の学校や幼稚園で教鞭を執ります。写真は麻布にありました、当時の東京市立麻布商工学校の工学部の新入記念の写真です。昭和 11 年ですのですいぶん古いんですけども、最前列に写っているのが在りし日の私の祖父の、昭和 11 年ですので 30

歳を少し超えた頃の写真です。これは同時に勤めておりました岩淵幼稚園の第 12 回の卒園記念の写真です。この幼稚園の学園は今もありまして、明照学園という学園で今も続けていらっしゃるようでございます。この後、ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、祖父は下伊那農業高校にも奉職を致します。「私は習った」ということを言って下さる方も良くいらっしゃいます。「おっかなかった」という方とそれなら「よしよしとして貰った」という方がそれぞれ居ります。これは本校の方に奉職をした時の写真でございますが、終戦の直後の話でございます。これだけ大勢の学生さんがまだまだ居られます。この学生帽からは終戦の雰囲気を感じることができるかと思えます。

これは先ほどの下市田学校の旧校舎を用いて昭和 23 年度から、農学校の市田村の分校ということで始まった新入生の写真でございます。これは第一回の卒業生の写真でございますので、この賑やかな中でこの正面にるのが私の祖父です。皆さんで肩を組んで卒業していくという写真でございます。これは昭和 28 年 3 月 20 日という記録がございます。市田の分校から中心校へと通学して、始めの一年を貰った人々という、そんなふうなコメントも書いてございます。「懐かしき古き学舎 今はまた新たに」ということで、新制高等学校の市田村分校としての再出発をした当時の下市田学校でございます。

東京から帰ってきた祖父でございますので、昭和 19 年からお寺の中で日曜学校を始めたとも言われております。その頃保育園という形ではやっておりませんでしたけれども、日曜日になると地元の子どもたちが集まって、私がどなたかに伺ったところでは「御詠歌を教えていただいた」という話も聞きました。憩いの場でありまたは集いの場であったようでございます。書道あるいはお華なんかも同じようにやっていたようでございます。

①パドマ保育園

さていよいよ保育園を開いて、子女育成に乗り出していく、そんな風なことになりました。こんな流れがあるのも自分の寺で、小学校の基となるような寺子屋をやって居ったというような思いがあったのではないかと思います。そして何とか子女育成、それを自分の道としてやっていきたいという思いが強かったのではないかと思います。パドマ保育園というのが境内の中にできました。卒業生の方も大勢いらっしゃるって伺って、私も調べてみたら、昭和 29 年から 15・6 年間、吉田保育園が町の方で開設するまではずっと続けて居ったと聞いております。これは秋の児童大会ということで、これは 29 年の開設初年度秋です。これはお寺の本堂の右脇の 4 間です。劇をしたり或いは歌を歌ったり、そんな様子がアルバムに残っております。これが最初の卒園児です。山門がございましてこれだけ大勢の子が当時いらしたんですね。これは昭和 30 年前後ですので、還暦を過ぎた頃で皆さんお元気だと思います。私の祖父と祖母です。あと先生方です。これは第 2 回の入園式で、これだけ大勢の保護者の方や地元の方達もいらっしゃったんですね。

これはだいたい時代が下がりまして、園舎を 10 周年ということで昭和 39 年に建て替えました。これはまだ家でございます。私の祖父や父が書道の教場として使っておりました。私も今ちょっとずつ始めておりますが、なかなか継続するのは難しいなあと感じております。子どもたちや私の同級生前後の大人でも緊張しながら筆を持つという時間がとても有意義だという事を言ってくれています。境内に大きな滑り台があった、そんな時代でございます。

これはちょっと面白い写真で、全町の運動会の写真がございましたのでのせました。「は」「ミ」「白」「パ」と書いてあります。ゼッケンですね。金太郎さんみたいですね。は は萩山保育園です。今の下市田保育園です。「ミ」はミツバ保育園。「白」は白百合保育園。「パ」はパドマです。市田村の方の運動会だったんだと思います。

②ミツバ保育園

続いてミツバ保育園の方にいきたいと思えます。これは牛牧の明永寺さん、ここに明永寺と書いてあります。提灯灯籠ですね。これは梵字が入っておりますが、ミツバ保育園、勿論認可前ですけども、牛牧にも保育園があつて欲しいという要望があつたんだと思えますが、パドマ保育園あるいは白百合保育園を開いてやって居った頃に、そんなところを頼られてお手伝いに行ったようでございます。これは当時の区長さんやお役の方々です。これが私の祖父で、これが伯母です。一番上の伯母ですが、保育士として手伝いに入ったそんな時代でございます。昭和 33 年ぐらいだと思います。ご存じのように、明永寺さんは広畔小校がありましたので、その跡地におそらく造ったのではなからうかと思っております。これはミツバ保育園ですね。天竜峡に遠足に行った時のものです。

③白百合保育園

次は白百合保育園です。出砂原の明照寺にできた保育園ですが、昭和 27 年に開設致しまして、開園当初の写真でございます。お遊戯の様子もこんな感じです。きっと金太郎さんなんですね、こちらの写真は。別の写真、これはどうやら私の父の幼少期のような感じです。こんなことでお遊戯をしております。

これはだいぶ時代が下がりますが、昭和 63 年の最後の卒園式です。この間宗教法人立から社会福祉法人立になって、いよいよ公にも認められてまいります。

今度は、今ある吉田河原保育園です。町立だった頃の吉田河原保育園と白百合保育園を統合しようという動きの中で、白百合保育園最後の卒園式でございます。時間も時間でございますが、曾祖父、祖父ときまして、父の話をしないうのもなんでございますので、こんな機会に思い起こしていただければと思います。父は喬木の中学校にも 2 年ほど奉職をしておったようでございますが、こちら、地元に戻って参りまして光専寺別院というお寺を建てました。これは吉田の河原にございますけれども、この地域の三六災害でだいぶ流されてしまって、新たに文化を発信できる地として、あるいはこのお寺を使って冠婚葬祭の基になれば、そんな場所になればという思いで作ったというふうに聞いています。やはりこの吉田の下段の人たちの集まる地域でありたいなあという思いがあったようでございます。平成 3 年の 2 月ですが、パドマ文化協会というのを設立いたしました、書道・華道・ピアノなどでやっておりました。これは発表会の写真です。これは昭和 63 年度白百合保育園と吉田河原保育園とが統合しての最初の卒園修了式の写真ですが、一年間無事にやってきた安堵感も見られます。県下初の公設民営方式の保育園ということでいろいろ大変なこともあったようでございます。昨年そんなことも礎にしながら、吉田河原保育園も私立になりましておかげだなあと思いながら、昨日は私立となって初めて送り出した小学校一年生の音楽会を見て、安心して帰って参りました。

これは平成 19 年に統合 20 年史として出し記念しすけれども、今の保育園の全景ですとか行事の運動会や夏祭りの様子、あるいは当時の思い出が載っています。風船が見えるのは、白百合保育園が閉園した時に屋上で風船を飛ばして、又未来への一歩ということの思いをそこに込めたというふうに聞いています。三六災害等々で新しい新興住宅地になったということもあって、神社仏閣あるいは習俗というものがなかなかない地域だと思っております、そんなこともあって保育園から発信できる地域に密着できるものはないかということで、こういう「胡蝶の舞」と申しますけれども、芸能の一つを取り入れながら、今活動しております。これがつい 2 か月前、花祭りです。ここに象さんの足が見えるんですが、お家からそれぞれ花を持ってきてもらって、花御堂を飾りまして甘茶を注いでお祭りいただいているようなことで、今も変わらずにやっております。その様子をみていただきながら、ちょうどお時間となりましたので。写真の説明で半分終わってしまいましたが、教育と言ってしまうとなかなか敷居の高いような感じもいたしますけれども、やはりその時代その時代で、子どもたちの姿そしてそれを支える親御さんたちの、子にける思いが一番大切なのかなと思います。小学校なんかは、こうして明治初期からの変遷、激動の中でいろいろ整えられてきたかと思うんですが、それも、いかにすれば子どもたちに十分な教育を受けさせることが出来るのか、まあ戦争も当時ありましたので、そこにも多少思いはあったのだろうと思いますが、礼節を重んじた日本人らしい教育の有り様はなんぞやということ、恐らく追求しながら来たんじゃないかと思っています。

私も、幼児教育ということでその一端をお預かりするものとして、この機会に改めて先人の思いを知ることが出来て本当にうれしかったなあということを思いますし、まあ今日は何を喋ってもいいということでしたので耕文小校以外のこともありましたけれども、そんな一連の流れの中で私たちは生かされているんだなあということを感じた訳でございます。

昨日の音楽会でも、本当にすがすがしい子ども達の歌声、あるいは一生懸命に取り組む楽器の演奏に心を打たれながら楽しんで参りました。楽しむということですけども、そこには三つの意味があるということ。一つはガクと読んで音楽の「楽」のこと、二つはラクと読むと極楽の楽、そういう意味にもなる。いわゆる「楽な」ということですね。もう一つが大事で、ギョウという読み方をするんですが、願うということです。お経の中には至心信楽という言葉が出てくるんですが、心の底から真の心を持って信じ願うのが至心信楽です。信ずる、楽と書いてギョウと読むんですが、そんな思いがいつの世も大事なかなあと思った次第でございます。

こうした機会に保育園のこと、お寺のこと、それぞれ布教の場として使わしていただいていたかなあということも思っておりますが、いずれにしても若輩の私が、この一時間半をどうやってまとめようかということもございまして、百聞は一見に如かずという言葉もございまして、この後一緒に、学校の変遷を見ていただきながら、お話をいただければと思っております。

少し時間が過ぎましたが、これをもって終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。ご清聴ありがとうございました。